Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

「野鳥」への関心を高める指導法

井頭　均（聖和大学）

1、はじめに

近年、自然開発や宅地開発が進むなかで、棲息場所を奪われて数を減らしたり絶滅に瀕する野鳥もいるが、一方都会生活にうまく適応し人間が出す残飯などを餌にして繁殖する野鳥もみられる。

私は、領域「環境」の授業のなかで、一回は野鳥について話すことにしている。将来、幼稚園や保育所の先生になる学生達が、少しでも野鳥や小鳥に興味や関心を持ってもらいたいからである。けれども、単に野鳥の種類や生物学的な説明だけをしていたのでは、なかなか彼らの興味や関心を高めることができない。そこで、野鳥にまつわる色々なエピソードを話したり、鳴き声を聞かせて名前を当てさせるなど色々な工夫をしなければならない。

今回の発表では、アンケート調査によって彼らの野鳥にたいする関心度を調べた結果や、鳴き声から名前を当てさせたときの様子などについて報告する。

2、調査方法

◇日時：1990年11月。

◇対象：聖和大学短期大学部保育科２年生 119名。

◇使用したテープ：四季に鳴く、ＮＨＫサービスセンター発行、1979。

3、結果

（１）野鳥にたいする関心度

まず最初に「野鳥への関心はどの程度ありますか」と尋ねたところ、「かなり強い」を選んだ者が５％、「まあまあ」が４５％、「少しだけ」が４９％、「全くない」が１３％という結果が得られた。

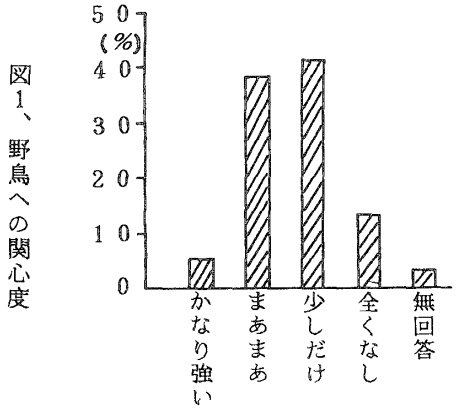


図1、野鳥への関心度

（２）野鳥の鳴き声

なじみの深い野鳥のなかから10種類（図２）を選び、テープの鳴き声を聞かせた。「これまでに聞いたことがありますか」という質問にたいして、ウグイスやキジバトについては「実際に聞いたことがある」という回答が90％以上あった。カッコウやフクロウ・ヒバリの場合、「聞いたことがある」と答えたうちの半数以上が「テレビなどを通して」であることが判った。「聞いたことがない」という回答が多かったのは、シジュウカラの52％である。

次に、鳴いている鳥の名前を書かせたところ、正解率が高かったのはウグイス(97％)、カッコウ（96％）で、フクロウ（69％）、トビ（60％）がこれに続く。その他のものは正解率が極端に低く、10％前後あるいはそれ以下という結果が得られた。

図２。鳴き声を聞いたことがある割合

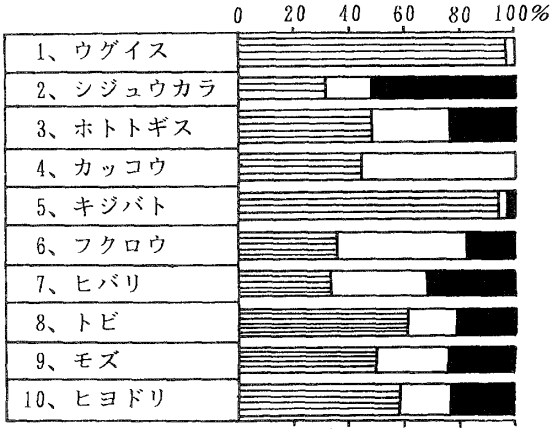
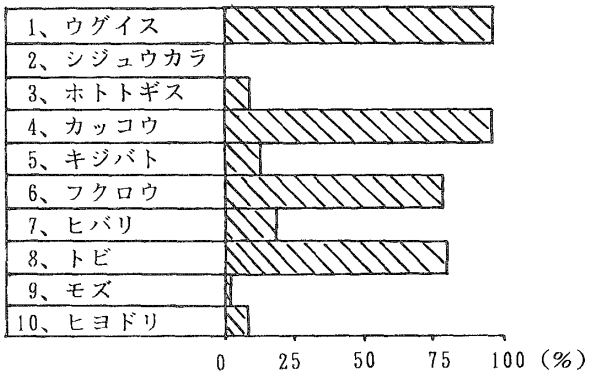


図３、名前を答えることができた割合



NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

（３）野鳥に関連する話題

野鳥の鳴き声を聞く毎に、鳥の説明やその鳥に関連する色々な話題について話したが、それらの話にたいして彼らがどれくらい興味を持ったか聞いてみた。話した内容は、次の通り。

①托卵：ホトトギスやカッコウなどが自分で抱卵せず、他の鳥の巣に産んで育ててもらう。

②閑古鳥：カッコウの鳴き声が聞こえてくる林のように静かなこと

③ハトの歌：ポッポッポーはキジバトの鳴き声で、豆を食べに飛んでくるのはドバトである。

④耳羽：ミミハズクの耳羽は耳ではない。

⑤長いさえずり：ヒバリの１分以上のさえずりは、呼気も吸気も使って声を出している

⑥ハヤニエ：モズがカエルなどのえさを木の枝につるしておく習性

⑦とり残された鳥：氷河期に南下してきたライチョウは、温暖化とともに北上せず高山に移動した。

⑧海鳥の川のぼり：ユリカモメは餌を求めて内陸深くまでやってくる。

⑨拍子木：コウノトリは成鳥になると、鳴かないで大きなくちばしを打ち鳴らして大きな音を出す。

⑩二足歩行：ヒトと鳥類の骨格を比較する

「これらの事柄について、これまでに知っていましたか」という質問にたいして、「知っていた」と答えた割合が比較的多かったのは托卵と閑古鳥で、それぞれ46％と44％であった。その他の項目については、「あまり知らなかった」あるいは「初めて聞いた」と答えた学生が多く、いずれの場合も70％～90％を占めている。

図４、①～②を知っていた割合

	だいたい知っていた	あまり知らなかった	初めて聞いた	回答なし
①	４６	２１	３０	３
②	４４	２９	２５	３
③	２７	１８	５４	２
④	１７	２３	５９	２
⑤	１９	２５	５４	２
⑥	１５	１３	７１	２
⑦	１０	１５	７３	２
⑧	２０	２９	４９	３
⑨	１４	２８	５５	３
⑩	１３	３１	５４	３

また、彼らがこれらの話にたいして興味を持ったかどうか調べたところ、「まあまあ」という答えが最も多かった。「強く持った」という回答が多かった項目としては托卵やヒバリのさえずりなどがあげられる。ユリカモメやコウノトリ・モズのハヤニエなどにたいしては、「少しだけ」という回答も比較的多く、約１／４あった。

図５、野鳥に関連した話にたいする学生の関心度

	かなり強く	まあまあ	少しだけ	なし
①	５２	２６	２	０
②	２６	３５	２０	０
③	２２	５０	９	０
④	２０	４１	１７	２
⑤	４３	３７	０	０
⑥	２９	２４	２４	４
⑦	２１	４３	１１	４
⑧	２６	２８	２６	０
⑨	３３	２４	２６	０
⑩	４１	３０	９	０

（４）授業にたいする感想

最後に、今回の授業にたいする彼らの感想について調べた。「今日の授業は、野鳥への関心を高めるのに役立ったと思いますか」という問いにたいして、「とても役にたった」が43％、「まあまあ」が44％もあった。

ところが、「半年後、あなたは今日の授業内容をどれくらい覚えていると思いますか」という問いにたいして、「だいたい」が９％、「少しだけ」が７７％、「ほとんど覚えていない」が１２％であった。

４、考察

これまでの領域「自然」は主として身近な自然の事物や現象を主な対象としていたが、今回の幼稚園教育要領の改定にともなって領域「環境」となった。子供達を取り巻く自然環境と社会環境を総合的に捉えようとするものである。

今回報告したように、私は領域「環境」の教材のひとつとして「野鳥」をとりあげているが、人間社会と自然環境の相互作用について理解するのに格好の材料となろう。

NII-Electronic Library Service